
被魔師物語(えくそしすとすとりー)【第一巻】

神崎 冥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えくそしすとすとーりー

被魔師物語【第一巻】

【Nコード】

N1795V

【作者名】

神崎 冥

【あらすじ】

被魔師育成学園「私立安心院学園放課後塾」は、その名の通りに「放課後」に「塾」としてやっていた。その、安心院学園の敵は「悪魔」だった！！

ヨハネの黙示録の四騎士や七つの大罪を敵にし、学園生は今日も戦う！！

エピソード1

【エクソシスト（Exorcist）とは。】

キリスト教、特にカトリック教会の用語でエクソシスムを行う人の事。

エクソシスムとは誓い、厳命を意味するギリシャ語であり、洗礼式の時に悪魔を捨てる誓約があるが、その後に悪魔にとりつかれた人から、悪魔を追い出して正常な状態に戻すことを言う。

かつてはカトリック教会の下級叙階の位階の一つとして存在し「^{つまし}被魔師」と訳されたそうだ。

また、日本の神道用語が転用されたことがあるが、キリスト教と神道は異なる宗教であり、まったく別概念である。

コレは、その様な事柄を使った物語である。
しかし、上記とはやや異なる事になろう。

そんな、被魔師の物語。

第一話

俺の名前は、「志具原扇」しぐはらあしき。

「あ、兄さん。義父さんが呼んでたよ」

この、黒縁堅物眼鏡はオレの双子の弟の、「志具原臃」しぐはらおぼろ。

扇「あー、分かったー。スグいくー」

臃「早く着てよね。僕も一緒に呼ばれているんだから」

ブチブチ言いながら義父さんのところに行く。

俺達は幼い頃両親に捨てられて、孤児院に預けられていた。

最初はやっぱり戸惑ったけど、先生達が優しくしてくれたからすぐに慣れた感じでいた。

けどそれと比例して、そこに住んでいる奴等からの虐めが始まった。

最初は、俺にちょっかい出してくる位だったから、俺も抵抗した。そのうち、臃にもちょっかいだして、臃はあん時弱かったからな。やられっ放しだったんだ。

抵抗する俺じゃなく。抵抗しない臃中心に虐めが始まった。

だから、俺が毎日守ってて。先生とか、気付かなかったんだよな、多分。

だって、向こうが仕掛けて来た時に俺が抵抗して相手に怪我させたらこつ酷く怒られたもん。

…っつか、そんな時はあんま、実感無かったんだよな。

なんで虐められていたかも分かんなかったし。で、それが確か…確か…、ん？何歳だったけな…？

臃「3歳の頃だよ」

扇「臃？…なんでいるんだよ。とーさんの所に行ったんじゃねーのか？」

臃「行ったよ。けど、兄さんが何時まで経っても来ないから僕だけ話し聞いて、そして今！！未だに来ない兄さんにイライラした父さんが僕を償還したんだ！！」

物凄い形相。

扇「あ、はは…悪かった」

苦笑い。

朧「まったく。……で、一体何を思い出していたの？」

扇「いやー、昔の話」

で、その後かれこれあつてこの、教会に引き取られた。
父さんの名前は「杉井与^{すぎいあたえ}」。詳しくは知んねえけど「神父」とかや
つてるらしい。

朧「もういいから。とにかく父さんの所、行つて」

迷惑そうに手を振る朧。

なんだ！！あいつ

扇「分かったよー」

第二話

トントン

扇「入るぞー」

俺は、ドアを開ける。

その瞬間——！！！！

扇「ぬおおおおおッ！！??」

誰かの飛び蹴りが飛んできた！！

扇「つぶねえ……」

与「おっ、扇！よく避けたな！！」

コイツ、俺達の父さん基、さっき言ってた「杉井 与」。
性格はとにかく、
いい加減。

扇「っつーか、何すんだよ!!?」

与「遅れてきたんだろ!飛び蹴りされて当たり前だろうが!!」

扇「当たり前って…」

なんかテンションうぜえ…

与「まあいい。ソコ座れ。」

真剣な声で言う。

さっきまで、変なテンションだったくせに。

扇「で、用って?」

与「まず、俺の事について教えてやろう」

扇「は?親父の事?…なん、知ってるよ」

まったく、俺達を呼び出したと思ったらそんな事が…

くだらないな……。

与「違う違う。そーゆー事じゃなくって。裏だよ」

扇「裏?？」

与「そ、裏」

.....

第三話

与「俺は元々この神父もやってるが、もう一つ。やってんだよ」

扇「もう一つ？」

与「そ。被^{ふつまし}魔師」

扇「腐妻市？？」

与「ちげーよ！ー！どうしたら、そんな間違えすんだよ！ー！……」ごほんっ、えーっと、まあ。そうだ。被魔師」

親父が行き成り意味の分からない事を言い始めた。
こいつ、オワタな^^

首を傾げると。

与「被魔師ってのは、エクソシストの事だよ。」

扇「えくそ…、しすと？」

与「そ。単純に言うとも悪魔被ったりする奴」

扇「は？」

エクソシストとか…なんか、かつけーけど。
コイツがエクソシストって…なあ？
信じがたい。

与「まあ、信じられないのは分かる。とにかく話を聞いてくれ」

真剣。

与「エクソシストは年々減り始めている。別になる人が居ないとか
そう言う意味ではない」

扇「じゃあ、どういう意味なんだよ」

与「殺されてるんだよ。悪魔に」

……言ってる意味が分からない

扇「エクソシストってのは、悪魔を倒すんじゃないのか？」

与「そ。つまり、悪魔を倒そうとして殺されてる。……もう、言っ
てる意味は分かるよな？」

分かんねえし。

いきなりそんな事言われて、そんな説明されて。

与「悪魔がレベルアップしている。」

扇「……」

暫くの沈黙。

そして、口を開く

与「ヨハネの黙示録の四騎士」

扇「世羽の目視六の四期視??」

与「どうなったら、そんな漢字になるんだよ!!?」

いや…だって、分かんねえし…

与「まあ、その四騎士がな…動き始めたんだ。」

扇「騎士…」

なんかカッコいい……
って、不謹慎か。

与「それらは、各こんな役割を持つ。勝利の上の勝利（支配）を得る役目、地上の人間に戦争を起こさせる役目、地上に飢饉をもたらす、疫病や野獣をもちいて、地上の人間を死に至らしめる役目……まあ、詳しくはそこで教えてもらえるだろう」

扇「そこ？？」

与「ああ……。そこで、だ。」

第四話

与「いきなりだが、お前達にも被魔師になってもらおうと思う」

扇「はあ！！？」

なんつった！！？

与「否定権はないんだけどな」

扇「ねえのかよ！！」

コイツ、俺が否定したときの事を想定してないな！？

いや、まあ。俺はエクソシストとか面白そうだからやってもいいかなあ……って思うけど。

強制的つてところが気に入らねえな……

扇「でもなんで。俺、悪魔見えねえぞ？」

与「はて……そうなのか……臃は昔から見えていたんだが……」

扇「はあ！？マジで！！？」

俺、そんな事聞いてねえし！！

つつーか、アイツ、そんな事一言も言ってねえし！

よし、後でお仕置きだな！！！！

与「まあ、双子なんだからそのうち才能が開花するだろう」

扇「そのうちってなんだよ！？」

やっぱり、いい加減だな！！

与「名前は、私立安心院学園放課後塾」
しりつあんじむがくえんほつかうけいじゅく

扇「放課後塾？？」

意味が分からん。

いや、分かるけど。

このネーミングセンス……理事長は凄くダサイんだな。

与「そ。放課後塾だから放課後の塾みたいなもん。3時30分から10時まで。」

えっと……ああ！！6時間30分か！

長いな……

第五話

扇「で、要するに俺はそこに通えばいいって事？」

与「そ、まあ。そんなところだ」

つつつてもなあ……

トントン

与「入れ」

俺と親父はドアの方向に眼をやる。

扇「臍」

与「おお！臍。丁度よかった。後でお前を呼ぼうとしていたんだ」

親父は、立ち上がり俺の横に座らせる。

臍「父さん。確か、明日出発なんだよね？」

与「おお。扇も準備しろよ」

扇「はあ!!!?明日とか!」

なんてむちゃくちゃな……

普通、前日とかに言うだろ!?

与「そうだな…まずは、えーっと」

なんか、ゴモゴモ考える。

そして、何を考えてかこんな発言をしだした。

与「二人とも。りっぱなエクソシストとなって俺のサポートに来い
!!!」

朧「え?」

扇「どーゆーことだ??」

与「俺は、今日の夜にこの家を出る」

扇「なんで!?!」

与「ほら、さっき言っただろ?人手が足りないんだって。」

親父はニカッとわらって言う。

俺達は固まる。

今日から親父と会えないらしいからだ。

臃「それで…父さんが行く…と？」

与「まー、一応エクソシストだからな」

………

臃「で…いつ帰ってこれるの？」

与「わかんねえ…けど。事が終わったら帰ってくるさ」

お、こんな時間だ、と親父は近くにあつた手軽の荷物を持つ。
そして、立ち上がる。

扇「ちょ、…まっ！」

与「まあ、二度と会えないってわけじゃねえ」

ドアの方に歩く。

俺達も比例して立ち上がって目で追う。

与「競争だ。俺が奴等四騎士を倒するのが先か、お前達が一人前にな
って俺を追い越すのが先か」

ドアを開ける。

与「それまで死ぬなよ」

扇「!!」

朧「!!」

内心驚く。

俺は、少しうれしかった。
朧と目があう。

扇／朧「お前もな!!／父さんもね」

第六話

バタンッ

ドアが閉まり、シンとなる。

俺と臃は暫くしてこの部屋から出た。
そして、俺の部屋へ。

臃「兄さん早く準備して」

扇「分かってるよー」

まったく！ブチブチうるせえ奴だな……

俺は、着替えやらなんにやらを鞆に詰め込む。

扇「出発は明日なんだろ？」

臃「でも、今日のうちに荷物作っておかないと。明日はぐっなっても知らないよ？しかも、明日朝市に出るのに……」

まったく！！これだから、頭のいい堅物眼鏡は！！

この後、朧にグチを零されながら荷物を纏めた。

第一話

扇「おらー、朝飯できたぞー」

俺の名前は「志具原扇^{しぐはらあき}」。

得意な事は、料理と喧嘩。苦手な事は、勉強。

隳「…に、い…さん」

扇「おー、隳。お前もメシ食え」

コイツは、双子の弟の「志具原隳^{しぐはらあほろ}」。

得意な事は、勉強。苦手な事は、料理。

所謂堅物眼鏡だ^^

コイツは、本来ならば「寝たら起こすな!!」派で、起こしたら半殺しされる。

あんなに弱っちよろい奴でも、寝起きや起こされたアイツには勝てないような気がする。

で、普段はしゃべらないのだが。

隳「……」

ここでは、毎朝日本食だ。

白米、味噌汁、焼き魚…全部俺のお手製だ。

よし！今日も完璧完璧い♪

臃も席について飯を食う。

他の教会の奴等も食べる。

「うーん、やっぱお前」

「料理だけは上手いな…」

「今日も美味しいぞ！！」

扇「あつはは、」

正直言ってうれしい。

自分の作った料理を食べてもらって美味しいって言ってもらえるのは。

臃「兄さん、出発の準備できた？」

コイツは、メシを食うとシャキッ、とするタイプだ。

だから、と言うわけでもないが。何かを口にする際は必ず、飲み物を口にしてから食べる。

まったく、変わった奴だ。

扇「そうだったな……」

今日から行くんだ。

忘れてたって事じゃないけど、

なんていうか、いつもの朝すぎて…

「いやー、扇のメシを食うのも今日で最後になるとは……」

「最後じゃないだろ」

「暫く食べれないだけ」

「うわー、残念」

うれしいな……

……って、え？

扇「は??」

朧「兄さん、僕も大体予想はついていたよ。まず、父さんが服を用意しとけて所から」

「え……まさかお前等、聞いてなかったのか？」

「マジ？」

「お前たち……」

「向こうの寮に泊まるんだぜ？」

え……

マジデカ……！！？

第二話

扇「はあ……まさか。お泊りだったとは……」

臃「お泊り……って、幼稚な言い方」

電車で揺られながら行く。

俺達は、朝の7時に家を出た。

ここから、8時について……臃の言う予定には。9時にいくかいかな
いかの時刻に着くって。

はあ……一時間も暇だ……

扇「臃ー、トランプしようぜー」

臃「兄さん。僕が今本を読んでいるのが見えないのかい？」

くっ!!

一々腹立つ眼鏡だな!!

あー!! 暇ッ!

P●Pもってくればよかった……

なんか、事件でも起きねえかな……

強盗とか、強盗とか、強盗とか

ドカァァアン!!!

扇／朧「「!!?」」

そう思った矢先。

向こうの車両から、爆発音が聞こえた。
それと共に人間がこっちに来る。

扇「なんだ!？」

朧「テロ?」

朧は本を閉じる。

俺と朧は立ち上がる。

ヤッベ…本当に何か起きてしまった

「ガッルルウウウ!!!!!!」

そして、聞こえる何かの声。

は、と朧の方を向くと、顔を真っ青にして震えていた。

扇「どうしたんだ？」

朧「に……兄さんには、見えないの！？アレが！！」

必死に言うが何のことか分からない。

でも、声だけが聞こえる。

見えない恐怖。

なにがいる？

近くに何かいる……

朧「あ、悪魔だ……」

その瞬間。

俺は固まった……

第三話

扇「あ、悪魔あ！？」

朧はさらに付け加える。

朧「い、いや…アレは、悪魔ってモンじゃない……………って、言うかアレ…オルトロスだ！！！」

オルトロスってなんだ？？

朧「オルトロスって言うのは、テューポーンとエキドナの子で、あの地獄の番犬であるケルベロスを兄に持つんだ。」

扇「地獄の番犬？？」

なんか……………すげえな！

朧「姿は黒い双頭の犬で、鬣一本一本と尻尾が蛇になっている……………って本で読んだけど」

頭が二つあるのか！？

やべえな、ソレ。うん、色々と。

朧「って、兄さん……聞いてる??」

扇「お、おう!」

俺は、音、声のする方向を見る。

扇「なあ、朧。ここにいるんだろ?」

朧「うん……って、言うか……なんでこんな所にオルトロスが……」

朧は、床に座り込んでブツブツ言っていた。

クレータ島とかゲーリュオンの雄牛とかヘーラクレースとか殴り殺されたとかなんか言っていた。
物騒だな……

朧「って、兄さん危ない!」

次の瞬間、右から衝撃をくらって左へすつとんだ。

ソレとともに襲ってくる痛み。

爪が食い込んでいるような感じがした。
そんなのは一瞬で、俺は壁に減り込んだ。

隴「う、わあああ！兄さん！！？」

扇「つつう……」

周りの奴等は、全員逃げていったのか、見えない。
一番最後の車両まで逃げたのかもしれない。

って、言うか

超いてえ！！！！痛い痛いいたい！！！！

隴「あ……」

隴は何かを思い出したように、ポケットを探った。

そして、水の入ったペットボトルの蓋を開けた。
なんだ？こんなときに水分補給か！？

そして、その飲むと思っていたペットボトルを
何も無いところに投げた。

ソレとともに、何かにコッソと当たって、水が掛かった。

「ガアアアアアアア！！！！！」

大きな声が聞こえた。

これが犬の出す声か！？

第四話

僕は父さんから預かった「聖水」を思い出した。

兄さんは「？」を頭に出していた。

思いつきり投げる。すると、オルトロスは苦しむ。いくらあんな大物でも流石に聖水は効くらしい。

とにかく、兄さんの元へ行く。

そして、肩を貸す。

臃「と、とにかく！！！！兄さん、今のうちに！」

逃げなくちゃ、殺される。

なんで、そんな大物がここにいるのかもわからないが、けど、今がやばい状況くらいはわかる。

兄さんは見えてないんだから…

いや…まあ、見えない方がいいんだと思うけどとにかく兄さんの横腹から出ている血を止血しなくちゃいけない。

物凄い血。

よくよく見れば袂えぐられてる感じ。

扇「まで、臃」

と、肩を貸して歩き出そうとしたとき。

扇「アイツは俺を殴った。…から、仕返さなきゃ気がすまねえ！」

頭に「怒りマーク」を出して言う。

はああああ！！？兄さんはこんな時に名に考えてんの！！？
し返す！？ムリだし！！

扇「大丈夫。二発殴るくらいだから」

もつと、ムリ！！！！

オルトロスを殴るとか！！

イライラしながら言うてるけど僕も相当イライラする。

見えない兄さんになんかこの恐怖がわかるものか！！
見えないからいえるんだらう！？

臃「兄さんふざけないで！！！！いい？コレは、僕や兄さんも愚か、
父さんも倒せるかどうか解らない敵なんだ！そんな奴を一発どころ

か、2発殴るって、ムリに決まってるだろ！？それも、兄さんは見えてないんだから！！！」

扇「はあ？普通やられたらやりかえすだろ？そもそもやられたままで、引くとかカッコわるい」

カツコいいとかカッコわるいとかの問題じゃねえし！！！！

扇「臃。奴の場所を教えろ」

臃「……」

ムリだ。

ムリに決まっている。

扇「早く」

臃「……」

扇「おい、堅物眼鏡！？？」

暢気すぎる。

あんな怪我也負わされて恐れていない…。

第五話

僕の兄さんは昔からそうだ。

” やられたらやりかえす。
”

” 言われてもやりかえす。
”

” やられたら二倍返し。
”

僕たちは昔虐められていた。

その間、僕は兄さんに庇われてばかりだった。

兄さんは、上記の事を常に実行していた。

靴に細工した奴がいるなら、細工し返す。

石を投げられたら、二発殴りに行く。

悪口を言われたら、言われた二倍殴る。

そのたびに、兄さんはお叱りを受けていた。

そんな兄について着てた僕。

それは、その孤児院を出た後でもそうだった。
どこでも、遣り通す。

僕はそんな兄に憧れていた。

そんな兄を目指していた。

そんな兄みたく、強くなりたい、と思っていた。

そんな兄を、守りたいって思った。

そんな兄に、いつまでも着いていこうと思っていた。

あ……

そうか……

兄さん。解ったよ。

そんな無茶苦茶な兄さんに

地獄の果まで着いていく事にするよ。

もし、兄さんが死んだら、ぼくも死ぬ事にしよう

もし、兄さんが地獄に堕ちたら、僕も堕ちる事にしよう。

もし、兄さんが世界中の皆に嫌われたら、僕も嫌われよう。

もし、兄さんが無茶苦茶な事をしようとしたら、僕もそれに付き合おう。

狂ってるって思われてもいい………

僕は兄さんに一生ついていくよ。

第六話

朧「分かったよ。」

扇「お？」

二ツ、と笑い振り向く。

扇「マジか？…じゃあ、さっそくサポート頼む」

傷が物凄く痛いくせに…。

兄さんは何時でもそうだ。何だって我慢する。

それこそ。

今回のそれは、とてつもない痛みなのに。

血が一杯でてるのに。横腹からも、頭からも。

いつもそうやって、無理して。

僕は、そんな兄さんが憧れだったり、バカだと思ったり。

まあ、それでこそその兄弟だと思う。

と、ここで

「う、動くなあ！…！！」

後ろから声がした。

僕と兄さんは振り向く。
そこに居たのは。

扇「今更警察か!!」

警察。

その警察官にもソレは見えているらしく。
銃を構えて震えていた。

それはそうだ。

コレが見えないなんてよっぽどのモンだから。

まず、見えなくても何となく気配は分かるだろう。
危ない感じも。

それなのに、兄さんはそんなのすらも感じない。

双子なのに…。僕が数分。数時間遅れた位でこんなに差が出るもの
なのか??

パンツ!!!!

発向する。

が、

ガキイイイン!!!!

オルトロスは、物ともしなかった。
片手で、ひょいっと受け流しただけ。

近くの鉄に当たって、大きな音はしたけど。
奴自体には、ダメージは喰らってなかった。

「ひ、ひいいい！！！！ば、化物おお！！！！」

今更な事を言うな…

警察官は、銃を置いたまま逃げてしまった。

扇「なんだったんだ？アイツ。」

朧「さあ？？」

と、僕は警官の持置いていった銃に目を落とす。

もしかしたら……

第七話

僕は徐に、銃を取った。

そして、弾の数を確認する。

隴「4個か……」

仕方ない……ずべこべいっても意味ないし……。

僕は、前から作っておいた特性の清塩を取り出した。

警察官は、なにかに拘っていたらしく、態々銀を使った弾にしていた。

隴「…塩や銀なんて、悪霊や幽霊にしかきかないんだけど……」

しかたない。

やってみるか……

だったら、塩に聖水でもかけとくか??

準備をする。

扇「おい、まだか?」

朧「よし、完了」

そして、銃を構える。

扇「うを！！？銃！？」

朧「兄さん。きつとこれも、時間稼ぎに過ぎない。から」

扇「ちょっと待てよ。さっきの警官もコレ打って駄目だったんだろ？」

朧「だーからー！！コレに少し細工したの！！ずべこべ言わずに、とつとと戦闘態勢入る！！」

扇「は、はいいい！！」

そして、戦闘態勢に入る。

第八話

銃を構える。

昔から射的は上手かった僕。

兄さんも上手かったけど、僕はほぼ百発百中だったから。
きっと僕の方が上手いんだと思う。

と、まあ。そんな事はいいとして。

臃「兄さんは、後方に回って!!」

扇「後方!?……あっちか!」

ダッ、と後方に回る。

きっと、僕の視線と警官が撃った方向で判断したのであろう。
兄さんにしてはナイス判断だ。

が、オルトロスは流行りそっちの方に視線を送る。
そして、大きな手を振りかざして踏み潰そうとする。

バンッ!!!

頭に銃弾を打ち込む。

臃「お前の相手はコッチだ!!」

囃作戦

勿論視線はこっちに向くことで。
そして、襲い掛かってくる。

恐い！！！！

と、その時。

ドカァ！！！！！！

扇「お？もしかして当たった？？」

その瞬間。

オルトロスは、右へ大きく吹っ飛んだ。

隴「え、ええええ！！？」

まさか、本当に出来てしまうなんて……

コレは、夢？？

扇「よし！あと……もう一発だな！」

第九話

兄さんは、爽やかな笑顔で地上に降り立つ。

なんか、予想できていたって言うか…

まあ、そうだったら僕の言葉は矛盾しているんだけど。

でも…やっぱり、兄さんは凄い！

そう、直感で分かった。

扇「ほら、もういっぺん隙つくれ」

言い方は腹立つけど…！

臃「っ…！」

扇「どうした？…ん??」

次の瞬間。

オルトロスが立ち上がった僕の方角に来た。
僕はなぜか動けなくなった。固まった。

そして、兄さんが僕のソバに来たとき。
ソレと共に、僕の前までオルトロスが来た。

朧「兄さん、前!!!」

扇「知ってるよ」

ドウウウン!!!

オルトロスが、片腕を大きく上げ大きく振り下ろした。
兄さんがそこに居たのに。

朧「兄さん!!!!!!」

その時。

僕の思考回路が止まった。

やられたのは、右腕。

ちなみに言うと兄さんは、基本両利き。

何故かって言うと、毎回喧嘩して腕とか怪我をしているうちに。右を怪我すれば左を使って。左を怪我すれば右を使うようになっていたからだ。

それとはたまにちなみに、僕も両利き。

勉強を片手だけでして居ると、その片手が痛くなるのもう片腕が使えたら便利でなー、って思って訓練したら使えるようになった。

話を元に戻す。

それでも。

兄さんは、辛いはずだ。僕なんかよりも…。

腹、腕、頭。

血

血だらけ……

扇「臍ー？」

臍「まったく……兄さんは」

無茶ばかりする人なんだから。

そんな兄についていくと決めたんだ。途中で脱落なんて格好が着か

ない。

僕は震える足をギュツ、と握った。

勇気を出せ。

大丈夫。

守られてばかりじゃ、ダメなんだ。

もう……子供なんかじゃない！！！！

朧「兄さん、右！！」

ダッ、と右に避ける。

朧「兄さん、前に顔が！！」

ブシュウウウ！！　グチュ

扇「ぐ、あああああ！！！！！！」

朧「兄さん！！！！」

扇「だ、いじょうぶ……」

兄さんに噛み付いたオルトロスは、兄さんを銜えたまま顔を上に

上げた。

兄さんの目はうつろだ。肩から胸にかけての所から血が耐えない。

臃「う、わあああああ！！！！」

バンバンッ

と、撃つがきかない。

対抗が取れてしまったのだ…

どうしよう！！？

怖い、恐いこわい！！！！

どうすればいいか分からない！！！！！！

でも、このままじゃ兄さんが死んじゃう！！

考えろ、考えろ…

さっき決意したばかりなのに……
僕は、どうする事もできなかった。

第十一話

ダンッ！！

と、叩きつけられる体。

意識が遠のいていく。

痛いって言うもんじゃない。

感覚が殆ど無い。

朧「兄さん、兄さん！！」

銃弾がなくなったのか、拳銃を投げてこっちに向かってくる朧。
意識が虚ろな所為か、そんな声もうつすらとしか聞こえない。

ダメだ。

眼を開ける、オレ。

ここで終わったらダメだ。

父さんと約束しただろ…

自分に言い聞かせても、無駄。
体が言うことをきかない。そればかりか、重くなっていくばかりだ。

ドンッ

と、オルトロスの足音がする。

起きろ、起きろ、起きろ、起きろ！！！！！

俺が。

兄が弟救えなくて

どうして、エクソシストになれるんだよ！！！！！！

動け、動け俺の体！！！！！！

第十二話

もうダメだ……

そもそもなんでこんな事に……

兄さんは、ボロボロ。

下手すれば死亡は確定してしまう。

僕は、腰が抜けたのか立てない……。
なんて情けないんだ……

目の前に、オルトロスがやってきた。
もう、だめだ……！！

僕は眼を瞑った。

……

朧「…え………??」

いつまでたつても来ない痛み。
僕は、ゆっくりと瞳を開いた。

朧「にい……さん??」

つらそうだった。

朧「兄さん！！？無理したらダメ！！！」

扇「い、ま…無理しないで…いつ…無理する？」

意識も虚ろなまま。

扇「次で…決める…！！！」

朧「え？」

扇「朧、離れてろ」

何をする気？？

僕は、少し離れた所に逃げた。

次の瞬間。

兄さんは、一気にオルトロスの腕を弾き返し、それから懐に入った。
そして、大きく拳を上げて

ドウウウン！！！！

「ガルウウウアアアア！！！！！！」

大きな物音を上げて、列車から外へ飛んでいくオルトロス。

朧「うつそ……」

ソレと同時に学園への駅に止まった。

扇「…う」

それを確認してか、兄さんが倒れた。

朧「兄さん…？兄さん、兄さん！！！」

僕は、壊れた列車の傍にいる兄さんの元へ駆けつけた。

第十三話

どうしようっ…

僕が悩んでいたら、シューウウ、と列車のドアが開いた。そして、ソコから背の高い女性が入ってきた。

「ふーむ、これはこれは……」

女性は、腰までの長い髪をポニテに結んでいた。髪の色は赤で、前髪の手先や髪の手先が白かった。

朧「……」

「おっと、お前たちか。杉井与すぎいあたえの言ってた奴は」

父さんの名前を呼んだ方思うと、ジーっと僕と兄さんを見比べた。何がなんだか分からなくて、僕は啞然とするしかなかった。

「初めまして、私は小鳥遊アルテ（たかなしあるて）。安心院学園の理事長だよんッ」

安心院学園の理事長…

アルテ「む…しかし、どえらくやられたもんだね」

兄さんの元にやってくる理事長。

アルテ「…しかし、何とやったら…ッ!!」

理事長は、列車の外を見る。

そこには、さっきやったばかりのオルトロスが気絶していた。

アルテ「コレやったのは、コイツか？」

臃「はい」

理事長は、ひょいっと列車を降りてオルトロスのほうへいった。

第十四話

私は、列車に乗って驚いた。

これほどの、悪気を持ったものがついさっきまでここに居たことに、まだ、この空間に色濃く残っているその気配は、悪魔級だった。

私は、驚いたことが一杯あった。

まず、この少年。オルトロスを気絶させるまでおいやっている。

ここまで出来るのは、正式な被魔師くらい……。こいつ等の様な入学？もしてない奴等に、ましてや、一般生徒に。

オルトロスを気絶させるのは愚か、接触することも出来ないはず。ソイツの悪気にやられて、気絶させられるのがオチだ。

それを。

気絶もせずに、それもまた気絶させた。

そっちの方は何も出来なかった感じだけど、気絶しなかった分凄いと思う。

アルテ「いっやぁ…将来が楽しみだねえ」

気絶したオルロスを還した。

そして、視線をあの子の兄弟のほうに移した。

アルテ「…倒れている方が、アサルト接戦科で、もう一人は、スナイプ射撃科って所か。」

私は、電話で救護班を呼んだ。
そして、二人の元に行く。

アルテ「えっとー、扇と臃だっけ？」

臃「はい」

アルテ「ひとまず、救護班よんどいたから、スグ来ると思う。きたら、私と、えーっと、お前どっち？」

臃「僕は臃です」

アルテ「そ、臃！お前は私と一緒に、来い」

こいつらには、違う教育を受けさせなければな。

臃「で、でも、兄さんは？」

アルテ「兄さん？ああ、扇か。大丈夫、大丈夫。死にゃーせん」

眼が疑っていた。

半信半疑って感じ。ま、何はともあれ。

有望な新人が入ってもらってよかったよ。

第一話

扇「……………んっ」

ボケーンとする意識の中。
真っ白な天井が見えた。

オレは…オレは……どうなったんだ？？

アノ後…

オレは、臍を守れて

奴を倒せたのか？

「ん？にやー起きたあ？？」

扇「ん…お、…ま、え…は？」

「にやっはっは！無理して喋らんでいいよ！」

腰までの長い髪をツイテにしていた女性がいた。
髪の色は赤で、前髪の前髪が白かった。

俺の声は、ずっと（？）寝ていた所為か、あまり出なかった。
少し咳払いしてみる。

「あたしは、小鳥遊アルト（たかなしあると）。ココの先生だにや」

にゃっはっは！、と高らかに笑う女、基アルト。

アルト「むう…しかし起きたか…上司に伝えなければな」

ここで、ひとつ疑問が生まれた。

扇「あー、あー…よし。…なあ、オレは…いつまで寝てたんだ？」

喉の調子を整えながら聞く。

アルト「ん…一ヶ月くらい」

えッ！？

一ヶ月！！？アレから一ヶ月も経ったのか！？

アルト「えっと、おまえは確か、志具原扇しぐはらだな」

扇「おお」

返事をする。

けど、なんでコイツ俺の名前知ってんの？

アルト「今から大まかな事を離す。一回しか話さないからな！？そこんどこよく聞いとけ！」

扇「はあ！？ちよつと、待てよ！！」

俺にも聞きたい事とかあるし！！
頭が混乱して話に着いてこれてない。

一ヶ月寝てたとか！
俺は、臍を守れたかとか！
アイツは倒せたかとか！
ここはどこかとか！
臍はどこかとか！！

アルト「あにゃー、やあーっぱ。アレか。まだ理解不能か…」

しゃーにゃいな、とか言いながらアルトは椅子の背もたれにだらしなく頼る。

アルト「特別に細かいトコまで話してやるよ。その代わり。話する間ぜってー喋んなよ」

第二話

ここ、「私立安心院学園放課後塾」はその名の通り放課後にある塾だ。

そこまでは普通なのだが、ここからが問題。その安心院学園は、普通の塾ではなく。

「悪魔を祓う事専門」の塾なのだ。そう、所謂「エクソシスト祓魔師育成学園」と言う訳なのだ。

この学園には、自分にあつた専門的知識を獲るために、それぞれ「科」がある。

アサルト
接戦科 - 接近戦。

剣、刀、ヌンチャク他、接近して戦う為の知識を学ぶ。

スナイプ
射撃科 - 遠距離戦。

銃、弓矢、ボウガン他、遠距離で援護しながら戦つたための知識を学ぶ。

サマンス
召喚科 - 召喚。

術や式神を使い戦う知識を学ぶ。

アトム
装備科 - 整備。
アサルト
スナイプ

接戦科や射撃科などの装備品のメンテナンスやカスタマイズの知識を学ぶ。

インフォルマ
情報科 - 情報。

情報処理機器を用いた情報収集と整理の知識を学ぶ（過去の事件など）。

アシビクラス
救護科 - 救護。

怪我した時にどうしたらいいかの処置などの知識を学ぶ。

入学当初に、望む科を選択し、その後適性テストをして一番その人に合っている科に入ってもらう。

それが学園のルール。だから、決しての自分が望める科に入れるわけではない。

尚、靈感がない人は無論。そつこく学園を追い出される事になる。

クラスは、上記の科の生徒6人を一組としクラスは一杯ある（219組）。

だが、上記の6人が揃っているクラスは少なく（198組）、中々実戦へとは出来ないらしい。

それが学園の悩み。一応、全部揃って教育もある程度できたら任務に望める。

学園内には、「任務表」と言うものがあり、任務をクリアしていく事によって、お金がもらえたりする。

任務にも難易度と言うものがありその、難易度に合った報酬が貰えるとのこと。

これは、就職して働いてお金を貰う喜びを体験するために作られたシステムである。

第三話

安心院学園は、一応学生寮があつて、何もしない昼間は働きにも行ける。

一応。私立安心院学園放課後塾は、「放課後の塾」で、列記とした学校の方もある。

名前は、「私立安心院学園^{しりつあじむがくえん}」と言い、普通の生徒でも通えるようになっていて（ただ、放課後塾の時だけ「被魔師育成学園」）。が、生徒は少なくなつた「55人」しか居ない。一応、高校。偏差値は普通より少し良い位。放課後塾に行つてる人も殆どが通つてゐる。

が、大半は違う学校からやつてきている人のほうが多い。

女子寮、男子寮があつてその中でもまた分けられている。

安心院学園は、敷地が少し狭いくらい。放課後塾の方は敷地が物凄く広い。

それは、理事長がお金持ちだつてこともあるけど、放課後塾の方に力を入れているのは、理事長の趣向。

で、勉強の方に話は戻るんだけど。

一応、「科」の勉強の時間があつて選択科目みたいになっている。

まあ…おおまかな設定はココまでかな。

第四話

扇「話なげえよお!!」

アルト「うつせえ!」

長々と話してか、扇はブチブチいつていた。
コイツの集中力って大丈夫か……???

扇「で、臍は!？」

一番聞きたがっていた事を聞く。

アルト「ああ?アイツならもうすっかりクラスの連中と馴染んでるよ」

扇「ふう……よかった……」

安堵の為か、溜息をついた。

そついやこいつ……自分が臍と違うクラスなのって気付いてっかな

それに、クラスの連中と馴染んでるって言うのは、「口から出任せ」って奴。

実質、本当にそうなのかはわからない。

扇「で、俺の科ってなんなんだ？」

アルト「まだ、適性テストうけてねえだろ！」

扇「あ、そうだった」

アルト「にゃーんて、ね！大丈夫。もう、お前の科は決まってるから」

扇「適性テストもして無いのに？」

アルト「ああ」

ウチの姉が言ってた。
一発で分かったってさ。

アルト「お前は、アサルト接戦科だ」

扇「接近戦……」

そう。

呟いた扇は、自分の手を見た。

扇「じゃ、臍は??」

アルト「アイツは、スナイプ射撃科」

銃の腕がハンパない。

この学校始まって以来の天才。
って、いうのも姉情報。

扇「そうか…」

アルト「ほれ、行くぞ」

扇「はあ！？どこに」

アルト「教室」

アホ顔。

扇「俺、けが人ぞ！？」

アルト「だーいじょーぶ、だーいじょーぶ。お前の傷、もう治ってるから」

扇「！！？」

自分の傷を見る。

そしたら、その通りに治っていた。

ここに運ばれて一週間。

あんな大怪我スグに治ってしまった。

勿論。あたしや他の人全員驚いていた。こんなに早く傷が治るものなのか？と。

ただ、あんなに長く眠っているのは異常で、ソレの反動だったのかもしれない。

第五話

扇「なんか腹へったんだけど」

アルト「我慢せえ」

さつきから、扇の腹の音が五月蠅い。

まあ、確かに。一ヶ月も何も食べてないんだから仕方ないか。あとで、焼き肉にでも連れて行ってやるか。

扇「教室まだか？」

アルト「あとちょっと」

確か、コイツの組って最新に練成される特別な組だったよな。その為か、教室はお古だったはず。

アルト「お、ここだ」

扇「零組…？」

練成されて、一週間。

まだ、人数は揃っていない。

今は、2人しかいない。クラスの奴等は自分達で独自にスカウトしなくちゃいけないからな。

この2人も今、悩んでいるのだろう。

ガララ〜

アルト「よーっす、お前等！元気してつか？？」

「先生！」

「先生イ、その人はダレですか？」

京弁の男が話しかけてくる。

アルト「新しい生徒」

「はぁ！？先生、ソレって俺達がスカウトするんじゃないかなかったんですか？」

アルト「コイツは特別。ほれ、自己紹介し」

ぽいつ、と扇を投げる。

扇「え、と。志具原扇です。よろしく…？」

「なんで疑問系!？」

「あっはっは!面白い子やわぁ…」

ふむ、馴染めたみたいだな。

「俺は、時雨^{しぐれ} 克^{かつみ}。よろしくな」

「僕は、藤^{ふじ} 勇^{いくれ}ですう」

2人とも挨拶する。

一応。時雨は超絶真面目で、頭がいい。

藤は、よく可愛い女見つけては話しかける。

扇「2人とも科はなに?？」

克「俺は、射撃科^{スナイプ}」

勇「僕は、装備科^{アドム}です」

扇「ふうん…」

時雨の武器は「弓矢」。これでも、弓道で全国大会いつてるらしい。
藤はそう言う武器の整備が得意なんだってさ。

克「そう言うお前は？」

扇「んー、俺？俺は、アサルト接戦科」

勇「ええ！？それほんま？すごいやん！」

扇「なんで??」

勇「え？志具原くん知らへんのん？ここの学園で組が殆ど揃わない理由。」

扇「へえ、そんなのあるんだ」

あたしはお暇させて頂きますか。
上司にも連絡しなきゃいけないし

勇「一つの科だけそろわなへんからなんやて」

扇「一つの科??」

勇「そう。志具原くんのアサルト接戦科やって」

第六話

ほー、俺は凄いのになっちまったんだな…
なんか、ラッキーって感じ。

勇「それでそんで！！志具原くん、何の武器使う！？」

克「まあーた始まった。」

扇「え？」

克「コイツ、武器好きでな。色々な武器みて整備したり、レベルアップしたりさせるのが好きなんだ」

扇「へえ」

凄い奴。

レベルアップって何！？

なんか、すげえ見たいんだけど…

扇「でも、悪いけど武器もってねえんだよなあ…」

克「は？だったら、アサルト接戦科ん中でも一番危ないといわれた、体術で戦うんか？？」

扇「体術…？ん〜」

勇「意味分からへんわあ…」

苦笑いの藤。

武器かあ……

克「あ、だったら特訓場で色々な武器試してみたらどー？」

扇「特訓場！？」

なんか、スゲー！！

そんなんがあるのか……

アニメやゲームみてえ！！！！

扇「何か知らないけどやってみてえ！！」

勇「そお？じゃあ、ついてきい」

と、俺はその特訓場とやらに行く事になった。

第七話

勇「ここや!」

扇「おお…」

そこは、とてつもなく広かった。

地下1階から地下7階まで続く特訓場は色々なものに充実であった。

1階は、接戦科^{アサルト}専用になっており、筋肉とか鍛えられる奴があった。あと、武器庫が何個もあった。それと、その武器を試すところも。バツティングセンターみたいな空間もあった。

2階は、射撃科^{スナイプ}専用らしい。的当てとか精神集中させるとか難しい事やるらしい。

時雨に聞いた。

3階は、召喚科^{サマンス}専用らしい。無駄に大きい空間で色々するらしい。道具や術式もそこには一杯あって、本もそれなりに充実している。

4階は、装備科^{アトム}専用らしい。なんか、いかに危険な状態で武器の整備が出来るかどうかとか。

武器を整備する為の道具とか。時々、接戦科^{アサルト}や射撃科^{スナイプ}等の武器の整備をするらしい。

5階は、情報科^{インフォルマ}専門。コンピューターやら資料やら過去の資料やらが山ほどあるらしい。

臃の様な、堅物眼鏡が特訓するところだな!

6階は、アンビュラス救護科専門。いかに危険な状態で処置が出来るかとか。人形相手に手当てをするとか、色々なパターンに望んでみるとか。他にも、訓練中に怪我したら手当てが出来るようにしてあるとか。

7階は、6人で受けなければならないモードで、実戦に近いらしい。

と、まあ。

その様な構造になっていて、大変広いらしい！

克「じゃあ、まず武器庫行ってみるか」

俺達は武器庫に向かった。

ガラアアー

勇「おお！……！やっぱり、安心院学園の武器庫は最高やわぁ……」

とか、言いながらいち早く入って行つてのは、藤だった。

扇「なんか……意味分かんねえんだけど……」

一杯武器つぼいがあるだけで。

克「お前はアホか。なんで、分からない？」

扇「ダレがアホだ!!」

勇「まあまあ…僕が説明するから。」

って、言つて。

武器の近くに行く。

勇「いい？今から紹介するんは、「刀系」や。ココから端っこまで言つていくと、」

と、言い最初に柄が少ない刀を指差した。

勇「中国刀ちゆうごくとう、柳葉刀りゅうようとう、胡蝶刀こちょうとう、カッタラス、シャムシール、ショ
ーテル、タルワール、サーベル、スクラマサクス、ファルシオン、
カンピラン、ククリ
、直刀ながまき（反りの無い刀）、日本刀にっぽんとう（にほんとう）、太刀たち、大太刀おおたち、
長巻ながまき、苗刀みょうとう、小太刀こたち、刺刀さすが、打刀うちがたな、脇差わきざし、軍刀ぐんとう
分かった??」

……藤には悪いけど全然わかんねエ
なにソレ…刀になんか名前があんのか？一々面倒……

勇「じゃあ、今度は「剣系」や。ココから端っこまで言ってくよ?」

今から、藤のどうでも言い武器の紹介だけです^^↑

勇「アキナケス、グラディウス、グレートソード、ショートソード、スモールソード、ブロードソード、カッツバルゲル、エストック、レイピア、ロングソード、バスタードソード、ツーンデッドソード、クレイモア…まあ、剣系は日本の少ないから、ほぼカタカナやねえ

中国剣やったら、単剣、双手剣とかあ

あ、じゃ次はあ」

他にもなんか、色々言ってた。
子一時間ほど紹介が続いた。

おや…?

なんだか、眠気が襲ってきたぞ?

第八話

克「おい、アホ、起きい！！！」

ドカツ！！！！

扇「ぬおッ！！！！？」

行き成り、頭に衝撃が着て目を覚ます。

どうやら時雨が、俺の頭をどついたらしい。

扇「いつてえなあ！！なにしやがんだ！！？」

克「何立ったまま寝とんねん！！」

扇「はあ！？」

って、言うかアレ……？

コイツも、京弁？

克「俺は、今日と出身じゃないけど、コイツと一緒に居たら自然に見についたんや」

おかしいなあ…だしてない思ってたんに、とかモロ京弁で話す。
いやいや、だしてないもなにも…

って、言うか。

方言ってうつるんだ…

克「お前、いい加減武器決めたらどうや？」

扇「お？おお…」

勇「そーそー、自分に一番あつた武器がいいから、今から全部試してみい」

扇「そうだな！」

こうして、俺の武器決めが始まった。

第九話

扇「はあ…結局決まらなかったな……」

克「お前がトロトロしてるのが悪いんだろ!!」

扇「そこまで言わなくていいだろうが!!」

勇「まあまあ……」

夜の10時ちよつとすぎた頃、やっと全ての武器を試したがどれも今一だった。

と、今。変える準備してる途中。

扇「うーわ、刃折れてるよ……」

克「誰のせいや!!」

勇「ああ…可哀相に……僕が直してあげる」

破れた物などを適当に拾い集め。

壊れた武器は、藤にでも片させて。とにかく、適当に片づけをしていた途中。

ギイイイイ

「「「?」」」

「何をしている、もう塾は終わっているぞ」

腰まで伸ばした金髪を靡かせながら、無表情の男が入ってきた。
それにしても、キレイな髪だなあ…

ソイツは、刀をさげていた。

勇「あ、すみません。スグ帰りますんで」

「……早く帰れ」

そう言って、クルリと方向を変え扉を閉めて出て行った。

扇「何アイツ!?!?!なんか腹立つ!?!」

勇「まあまあ…」

こうして、俺たちは適当に片づけをして家に帰った。

第一話

アルテ「んで、扇^{おひぎ}の方はどーだ？」

アルト「んー、まあ。ソコソコだな。」

シン、とした部屋。

あたしと、姉のアルテは向かい合って話す。場所は、理事長室。

アルト「弟の、臍^{おへら}は？」

アルテ「言ったる？住の腕が凄いつて。そんで、その後もすんごい成長」

アルト「そつか…、はあ…あたしの方は大丈夫かなあ…」

そして、コーヒーを啜る。

アルテ「だいじょーぶ、大丈夫。私は、扇の方がやってくれと思うけどなあ…」

まったく、人事だと思っている。
すぎいあたえ
杉井与も何を考えているんだ…

アルト「臃の方はクラスに馴れたか？それが一番心掛かりなのだが」
アルテ「だいじょーぶ。スグに打ち解けたよ。コレが、臃の能力か
にゃ」

なんていいながら、またコーヒーを飲む。

アルテ「扇の方は？」

アルト「んー、こっちは二人しか居なかったからにゃ…、スグに馴
染めたと思う」

アルテ「そりゃー、よかった」

そして、また暫く沈黙となる空間。
と、ココでノックが鳴った

アルテ「はいー？」

そして、扉が開く。

アルト「！！…アルテ」

姉、アルテの名前を呼ぶ。

アルテ「にやはは…、特別に収集させて頂いたよ、いらっしやい

アーサー」

ヴァチカン最強の騎士。

聖剣「エクスカリバー」の所持者…

長い腰までの美しい金髪を持つ男性。

「アーサー」

第二話

アルト「くきる…おき……………にゃ…る……………起きる、…にゃあ…！
！…！」

ドンッ！…！

扇「ぐはああ…！？」

行き成り走った背中の痛みを思いっきり立ち上がる。

アルト「お前…なんで教室で寝てんだ？」

扇「いや…寮とかの場所分らないくて」

アルト「だったら、職員室にこいよ…！…！」

行き成り怒鳴られる。

うう…寝起きの頭にはきつい……

アルト「まあ、いいや。午前中は塾じゃなくて学校だから、案内してやるよ」

扇「お、おう」

アルト「ほれ、いくぞ」

と、教室からとつとと出て行くアルト。

俺も負けじとついていく。学園から出て、2、3分経つくらいのところ、二つ道が分かれていた。

そこに、女子寮・男子寮とかいてある看板があつて、そこを男子寮の方に曲がった。

アルト「ほれ、いくぞ」

とつとといく。早歩きじゃないかと思つほど。

俺も早歩きで行く。そして――

アルト「ついたぞ、ここだ」

そこは、大きな建物であった。
大きくて物凄く部屋がある……

アルト「ここは、男子寮αだ」

扇「α（あるふぁ）？」

アルト「ここ、使ってる人少ないから。あと、女子寮の方はまったく使われてない」

扇「はぁ!!!？」

意味の分からない所に連れてこられてしまった……
別に、今まで使われてない様子はなかったのに……

アルト「うん、4、5人程」

第三話

中へ入る。

そこは、綺麗な廊下だった。

入ってすぐに、階段があり階段は屋上まで続いている様子。

扇「ココ綺麗だけどさ……なんで4、5人しか住んでないんだ？」

アルト「ここは、おまけに作られた所だからにや。って……ん？……いや、この前5人とも卒業したか……だから、誰も住んでないぞ」

扇「はあ！？」

どっちなんだよ！！！！

って、言うかその前に「おまけに作られた」って！！
失礼だろっ！！まあ、部屋とかがなかったとかの理由なら分かるけど……

と、俺は、入って右側の食堂へ行った。

アルト「お、着て行き成り食堂か？食い意地はってんな」

扇「違えよ！！」

と、俺は調理器具を覗く。

ほお…中々よくそろってるな……

アルト「ここ、生徒少ないからつつーか、生徒いにゃいから自炊しなきゃいけないぞ」

扇「はっ、自炊上等！」

逆に十分で作らないと気が済まない！！

アルト「意外だな」

と、言う。

そして、案内してもらう。

アルト「ここがトイレ

ここが風呂

ここが流し

ここは二階、100号室～200号室まで

ここは三階、300号室～400号室まで

ここは四階、500号室～555室まで。」

すい…

本当におまけでつくられた奴なのか…？

そして、屋上へ出た。

アルト「ここが屋上だ」

扇「ほお…いい景色だな！」

アルト「だろ？ここ安心院学園全部見渡せるんだぜ」

良い風が吹く。

扇「そういえば俺の部屋は何処なんだ？？」

アルト「一階の食堂の傍。」

扇「……そんな所紹介されてなかったけど」

アルト「面倒だから後で紹介しようと思ったんだよ」

扇「後の方が面倒じゃね!？」

まったく！意味の分からない奴だな。

しかし…何故食堂の付近なのだろうか…？しかも四階もあるのに一階って!!

まあ、食堂の近くなだけ得だと思っけど。

暫しの沈黙。

アルト「そろそろ、お前の部屋に行くか」

アルト曰く「一階にはお前の部屋含めて二つしかない」らしい。
つまり、一階だけ何故か二部屋しかない。

本当に変な構造になってるな…安心院学園……

く部屋へく

第四話

扇「ほお…ここが俺の……」

アルト「中々だろ？」

扇「あれ？俺の荷物」

アルト「ああ、あたしが運んどいた」

ほお…

ソコには、机が一つあって、ベットが一つあってクローゼットもあった。

一人が十分に生活できるスペースがあった。まあ、そこには、俺の荷物も遭って。

扇「あれ…？」

クローゼットの中に制服があった。

アルト「ああ、コレ。塾生だし、一応着てても良いんじゃない？って
嘶」

扇「はあ…？」

アルト「まあ、明日から塾はそれ着て来い。」

扇「命令かよ」

なんつー…

第五話

アノ後、かれこれしたら3時30分になって、塾の始まる時間になった。

俺は、塾に向かう。そして、着いたのは、40分。少し迷ってしまった…

扇「ちわー」

アルト「扇、遅刻だぞー」

勇「何時に寮でたん？」

扇「んー、30分」

克「集合時間に寮出発してどうする！！？このアホ！！」

扇「誰がアホだ！！！！エセ京弁！！」

克「なんやと！？」

バチバチッ、と火花が散る。

アルト「はい、そこまで」

と、アルトはとめに入る。

克「先生！」

扇「なんで止めんだよ！」

アルト「お前、遅刻してきたくせに生意気だな。廊下にも立ってる！！」

扇「なんで俺だけ！？」

ひどっ！！

って、な訳で。頭と両手にバケツを持って廊下に立つことに。一応、制服を着ている。カッターシャツにズボン。カッターシャツの胸に校章が入っている。

アルト「~~~~~、」

なんか、ペラペラ喋っている。

俺は、ポケットと外の景色をみながら立っている。

扇「はぁ……」

と、こっで。

ふわり、とシャンプーの香りがした。

扇「…ん？」

俺は、その香りが下方向を向く。
そしたら、ソコには…

扇「昨日の奴！」

そう、昨日の金髪の男がいた。

「……………」

向こうもこっちに気がついたのか、こっちの方を向く。

扇「……なんだよ、無表情」

あまりに無表情で、こっちの方をジーっと見るので俺は少し不機嫌になる。

ジーって見られるの好きじゃねえんだよ！

「無表情とは失礼なガキだな」

そういい、近づいてくる。

「私は……アーサーだ」

第六話

扇「誰がガキだ!!?」

アーサー「ふん」

アーサーとやはらは、生意気に俺よりも身長が高かった!!!

扇「そもそも、お前なんなんだよ」

アーサー「私は私だ。それ以外の何者でもない」

扇「だああ!!そうじゃねえよ!」

アーサー「意味が分らん」

コイツ…バカなのか!?

扇「おい、アーサー」

アーサー「!……初対面で呼び捨てされるのは初めてだな。」

なんて、涼しい顔で言う。
なんて腹立たしい！！（）

アルト「おーい、なに騒いでんだー、ウザいぞ、扇」

扇「おう、アルト！この、無表情どうにかしてくれ！」

と、ここで。

アルトが中から出てきた。何時ものように、ツイテを靡かせながら。

アルト「！……おっと、アーサー？」

アーサー「…む」

お？もしかして知り合い？？

扇「お前、コイツの事知ってんのか？？」

知り合いなら何とかしてもらいたい！
この、でかい態度を！

アルト「お前、この刀を見ても分からないのか…？」

はあ…と溜息をつかん限りに、アーサーの刀を見せる。
…別に変わった事はないが…

扇「別に普通じゃないか？」

アルト「はあ…ここまで無知とは…」

は…？だから、意味分かんねえって

第七話

克「えええ！？…ま、まさか…聖剣エクスカリバーの所持者にてヴァチカン最強の騎士…「アーサー」ですか！！？」

と、いきなり大声で言う時雨。
うるせえよ…っつか、いつからいたんだよ！！

アルト「そ、正解。よく出来ました」

克「でも、そのアーサーさんがなんでここにいるんですか？」

アルト「にやはは」

って、言うか。

聖剣「エクスカリバー」？ヴァチカン最強の騎士？
なんか、カッコいい言葉並べてっけど…そんなにすげえ奴なのか？

アルト「アーサー、コイツが例のオルトロスの…」

アーサー「…このガキが？」

俺を指差して言う。

なにコイツ…

ジロジロと、俺の顔を見る。

だぁぁ！！！！だから、俺は人にジロジロ見られるのが嫌いなの！！！！
見るな、見るな……

なんて言えず、ただ冷や汗かいてずっと立っている。

少しでも顔を逸らせば、頭に乗っているバケツが零れるからだ。

アーサー「ふっ」

扇「なんだよ、その笑い！！」

勇「志具原くん、凄い…あんな凄い人とタメ語で話しとる……」

第八話

アノ後、アーサーは「行く所がある」とか言ってどっかに消えた。その直後にチャイムがなったため、俺たちも休憩時間になった。

って、言うか本当。塾って言うか、夜間の学校みたいだな。チャイムって…休憩って

アルト「お前らー、次あそこの森で薬草取りに行くから準備しとけよー」

勇「ええ！？こんな時間なのに森に行くんですか！？」

アルト「明日までに必要なんだよ。さ、準備」

と、俺たちは外に出る準備をした。薬草って何だよ…と、藤が

勇「志具原くんー、行きますえー」

扇「おー」

く 森

克「おー、やっぱり暗いなー」

勇「なに、暢気な事いつとん！？怖い思わへんのん！？」

克「んー、微妙」

アルト「おーい、お前ら私語は慎めー」

俺はアルトの後についていきながら、周りの景色を見る。
まっくらで何も見えない。そんな中、懐中電灯の光が四つ輝く。

アルト「この洞窟でーっす」

克「更に暗ッ！ー！」

勇「恐ッ！ー！」

扇「寒ッ！ー！」

今現在は、冬ではない。

ので、あまり寒くはないのだが洞窟から吹き込む風はあまりにも冷たかった。

アルト「じゃー、お前ら。この紙に書いてあるもんと一緒のもんと
ってこい」

「「「……………はぁ！！？」」「」」

勇「せ、先生は行かないんですあ！！？」

アルト「んーまー」

適当に答える。

コイツ、着いてこないのか！？

アルト「ほい、コレ。」

と、俺たちに無理矢理紙を押し付ける。

そして、片手で俺たちを追い払うようなしぐさをした。

アルト「ほれ、さっさといって来い、クソガキ共」

「「「なっ！！！！？」」「」」

第九話

アノ後、腹立って殴ろうとした所を藤に止められ
時雨と藤に引きずられて、洞窟の中に入った。

克「しゃーないのー、あの先生はいつもそうなんやから！」

勇「そーそー、せやから、もうちょっと穏やかに、な？」

と、俺は渋々自分で歩く事にした。

扇「これが…」

勇「あ！ありましたえー!!」

克「本当か？」

と、俺たちは藤の所に行く。

すると、紙に書かれたのと同じ、草が生えていた。

扇「おお…本当、」

何の草か知らんけど、発見。
本当にこんな草が、役に立つのか…？

勇「……たしか、45本要りますよね」

克「そうやけど…、なに？ なにかあった？」

藤は、草をとる。

勇「実は一本足りんのんよ」

扇「ええ…また、中途半端な…」

克「仕方ない…おくまで行くか……」

ああ！あと、一本は生えていればスグ帰れたのに！！
と、俺はどうしようもない怒りを放出できないままそのまままた、
洞窟の奥へ出発した。

く暫くして

勇「アレー？ありませんね？」

克「おかしいなあ……」

もう、小一時間歩いている。

はあ……クタクタだ……足が痛い、疲れたー

ドオオオン

扇「……ん？？なにか、聞こえなかったか？」

勇「えー？何も聞こえてませんよー」

気のせいか。

ドオオオン ドオオオン

扇「やーっぱ何か聞こえるんだよな」

と、ドンドン奥に進んでいくに連れて音が大きくなった。

克「……俺にも聞こえてきたわ」

なんて、時雨が急に言い出す。

扇「しっかし、何の音なんだろ」

不思議に思いながらも歩く。

勇「ねえ…知ってはります？」

扇「なにを？」

勇「この奥に、『三種の神器』の一つである『草薙剣』、別名『あまのむらもとのつるぎ天叢雲剣』って言うのがあるんです。」

克「三種の神器が！！？」

勇「まあ、噂ですけどね。その、草薙剣を守っている『大蛇』がここにいて噂があるんです」

扇「へえ…っつか、そんなにすげエモンなのか？」

克「当たり前やろ！！」

いやあ…確かに、名前的にはカッコイイって思っけど…
三種の神器は、みくさのかむだからって呼びかた意外、しんしゅの

しんき（じんぎ、しんぎ）とか呼ばれているらしい。
藤が今さっき言ってた。

勇「！」

克「どうした？勇」

勇「か……克さん……あ、ああ、アレ……」

藤が震えて、指を指す。

俺は、ソッチの方向へ向く。…何も無い

が、時雨の方を向いたら

克「あ…あれは………！！！！！」

扇「なに？何がいの？？」

克「おまえ…ほんまアホか！！！！見えへんのか！？あの…大蛇が
！！！！」

どうやら、そこには大蛇がいるらしい…。

第十話

扇「大蛇あ!？」

それって、さっきの話じゃ…

勇「ほ、ほんまに居るとか思わへんかってん!?!」

克「くっ!こんなときに、武器が…」

武器を持ってない時雨。

どうやら、そこにいるのは確からしい。

二人ともおびえた顔をしている…俺には見えない。

腹立たしいほど見えない。なんで…弟のアイツには見えて俺に見えないかが不思議だ。

勇「志具原くん!？コレ、ほんまに見えてへんのん!？」

扇「あ、ああ…」

克「なら、なんで入学できたんや!」

扇「しるか!」

俺は、その大蛇とやらと距離を取る。

「シャアアアア！！！！！」

威嚇をしているらしい…

勇「どうする！？帰って先生に言いに行く？！」

克「そりゃ、そうしたいけど…！！！」

と、時雨はさっききた入り口をみる。

どうにもなってない。俺は、入り口に行き、ゆっくりと触ってみる。

ヌルッ

扇「うわっ…きもっ」

克「お前、バカか！そこに、大蛇の尻尾がある！俺たちは、閉じ込められた…！！」

そう、俺たちがいる所は、ただっぴろい空間で、天井も物凄く高い。

直径100m以上ある。すごく広い。真っ直ぐ先に2つ段があって

そして、もう一つ。

3段目の段は大きくなっていて真ん中に剣が刺さっていた。

なんか、勇者が抜くアレみたいな。

扇「なあ…さっきの話が本当ならあの剣は…」

勇「…本物かも!？」

本物…

と、時雨が口を開く。

克「幸い、俺もお前もそして勇も武器を持ってない。そして、コイツを素手で倒す事は恐らくムリ…どこここからは出れない。こうなったら俺たちは殺されるのを待つだけ……」

勇「そんなッ!」

扇「ふざけんじゃねえ!!!」

克「まあまあ、話しはココからだ。お前、接戦科だろ？」

行き成り聞く。

さっきから、変な推測したり、質問したり…なんなんだ、コイツ……

扇「ああ……」

克「そこで、だ。」

第十一話

扇「よし、分かった」

勇「ま、まあ…やらんよりかわ…ええんちゃう？」

克「よし、そうと決まったら…」

時雨に作戦を伝えられた。

作戦。これは、この二人を囷にした作戦となる。

俺は、いやだ。けど…今は止むを得まい……

克「いいか？お前は何かあっても絶対に立ち止まるなよ？」

扇「おう！」

そう、立ち止まらずに走り続ける。

俺がやる行動。単純に見えるが、ハードなのだ。

勇「それじゃあ…」

克「作戦開始だ！！！」

と、その声とともに、近くにあった石を投げる。
すると、自然と二人に向けられる。

「シャアアアアアアアア！！！！！！！」

勇「ひっ」

克「ひるむな！！」

そして、俺も走り出す。

克「そこを飛べ、志具原！！！！」

扇「おう！！！！」

と、大蛇の視線が何となく俺の所に向けられているのが分かった。
俺は、構わず飛ぶ。そして、着地した所が大蛇の背中だって事を理解する。

又ルッ、とスベルそこ。

扇「つぶねえ……」

俺は、その上を走る。

一方の二人は、大蛇の気を引いている。
石を投げたり、一部を蹴ってみたり。見えない俺には珍百景としか
思えない。

何もない所に、何かしてる二人：イタイな^^

克「志具原あ！！前！！」

何か分からないから、とにかく殴ってみた。
何もない空間を。そしたら、手ごたえがあつて。

「シャアアアア！！」

扇「ふっ…当たったか？」

克「ああ！鼻に当たった」

勇「す、すごい」

と、俺はそのまま走った。

第十二話

走って走って走る。

そして、剣の持つ所が見えたとき。

勇「ああ、ああ……！」

克「い、いぐれ……！」

俺は立ち止まる。

扇「藤……！」

胸と腹の所から血が吹き出していた。

その二つは、大蛇にかまれたような感じで……背中からも血が出ているらしい。

克「こんのッ……！」

藤は、その場から数センチ浮いていて、ぐったりしていた。
多分、現在進行形でかまれている。

時雨は、何もない空間を殴る。

「アアアアア！！！！！」

すると、ポイツ、と投げられる藤の体。
それを、とる時雨。

克「くっそう…なんで」

吹き出る血を押さえながら言う。
悔しそうに。俺は、どうする事もできず高い位置から二人を見ていた…

勇「克さん…もう…いいです……」

克「なに言っとなや！？」

扇「時雨、あぶない！！」

克「！！！！？…ぐう！！！！！！」

俺は、うつすらと感じた。
大蛇が、尻尾で時雨を鷲掴みにする所を！！

克「た、立ち止まんな！！！！！！……走れ！！」

扇「お、おう！？」

じゃなくて！！

それでも、俺は走った。後ろから、時雨の呻き声がある。

走れ、走れ、走れ！！！！！！

第十三話

そして、草薙剣とやらが刺さっている所へ到着する……

扇「ハアハア……」

そこは、眩しい光が差すところ。

確かに。この空間に入ってから、懐中電灯がなくても大丈夫なくらいの明るさになった。

が、ここはそれ以上だった。それ以上に輝いていた。

そして、その剣の前には……白い体の赤い目の小さな蛇がいた。

——まっていた。

扇「……は？」

しゃべった!!？

扇「お前……なんだ……？」

——貴方を待っていました。

扇「俺を…？」

——はい

意味分からん…

俺には、蛇の友達なんていないし、そもそもコイツは知らない。
どういうことだ…？

——貴方に…貴方に捧げたい物があります

扇「捧げたい物…？俺、お前にプレゼントされるようなことしたか
…？？」

うむ…心当たりがない…

何かあったか？

たとえば、虐められている時に助けたとか…罨に掛かったのを
助けたとか…

ないない…最近蛇すら見てないくらいだ。蛇など助けた覚えはない

扇「で、俺にくれるもんってなんだ？今、忙しいんだ」

そう、二人を助けなくてはならない

——こちらの、「草薙剣」です

扇「……………ええ!？」

驚く。

俺に、草薙剣とやらをくれるのか。俺は、借りるだけにしようと思
ったのに

扇「でもなんで…」

——この剣は暫くこちらに封印されていました。理由は簡単です。
この剣の所持者がいない。

いや、それでも…

なんで、俺にくれるんだ？俺が所持者になったってわけじゃある
まいし…

——そうです。貴方様が剣の所持者になったって訳ではありません
扇「どういうことだ？」

コイツ、心読みやがったし！

——これから、なってもらうのです

扇「なってもらう…?」

——はい、実は。予言があつたんです

扇「予言…」

——「ココ来ル者、其所有者ナリ」…と

扇「…だったら、俺以外にココに来た奴がいたんじゃないのか?」

そう、俺達みたいに薬草を取りに来た奴とか
迷った奴とか…居た筈だ。

——はい。しかし…他の物はコレに殺されました。それに…

扇「それに?」

——いえ、なんでも

扇「気になるじゃんか」

——まあまあ……勿論。ここまで来た人もいました…しかし…
この剣を抜ける事はありませんでした。それよか、この剣に触った
人は雷に撃たれて死ぬんです

扇「え!？」

——そう、つまり。適合者でなければ……

扇「死ぬ……」

か……

恐いな……本当

第十四話

——さて、抜いてみてください

ええええ…

マジデ…？……くれるっていったのに！

——勿論。これを使いきたらの癖です。

………

克「ぐあああああ！……！」

扇「時雨！……！」

俺は、剣と一対一になる。

——さあ、どうしますえ？

扇「ちくしょう！……！」

俺は、剣に触る。

そして、思いっきり引っこ抜く。

その瞬間。

ピカーー、と夜にはありえない。眩い光が部屋中を包んだ。

扇「ぬ……けた？」

——！！……凄い、この剣が反応しています…適合者だと……それになにより……この剣が貴方の元に行きたがっています

その証拠に、ほら

と、蛇は刃の光をさす。

——貴方こそ、この草薙剣の継承者です！

そして、俺は下の二人を見る。

扇「……時雨を……話せえ！！！」

飛び降りて尻尾を切り裂く。

剣を抜いた瞬間から。光が俺たちを包んだ瞬間。

俺は…奴の……大蛇の姿が見えたのだ。

凄い……すごい……スゴイ……
俺にも……見えた！

ブシュウウウ！！！！

「シャアアアアアアア！！！！」

克「ごほっ……し、ぐはら……？」

扇「うおおおおおおお！！！！！！」

そして、奴の顔面目掛けて刀を切り裂いた！！！！

第十五話

扇「ハアハア……」

克「やって…もうた……」

やった…
できた…

扇「ハアハア」

俺は、草薙剣を鞘に収めた。
そして、座る。

扇「コレ…軽ッ」

今までのどの武器より軽い……

扇「あ……」

ふ、と近くを見ると。

例の頼まれた薬草があった。

く洞窟の外

扇「ハアハアハアハア…はあ…！！！！！」

アルト「ちょ、お前ら！やけに帰りが遅いと思ったら…」

アルトは、驚く。

俺は、時雨をおんぶし、藤を抱っこし、草薙剣（以下、草薙と称す）を腰に下げ、片手には薬草。まったくもって、変な奴だ……

アルト「何があった…」

俺は、全部話した。

今までの経緯を。全て。それを、何も言わず。相槌だけを打って聞いてくれた。途中で、医療班がきて二人を連れて行った。

アルト「……なるほど……それは、また…」

俺とアルトは、真っ暗な道を歩く。

アルト「む…それが、草薙剣か」

扇「ほら」

俺がアルトに刀を投げると

アルト「ぬわっ！…！お前！これ、触ったら死ぬんじゃないの！？」

扇「いや、大丈夫。……多分」

アルト「何を根拠に」

扇「ちょ。直感？」

俺は落ちた剣を拾いながら言う。

アルト「あ、でもそっか…。所持者がいいっていつてゐるんだから…」

とか、言いながらそおーっと触る。

アルト「おお…触れた」

扇「ビビりすぎなんだよ」

と、ゴツツと殴られた……！

扇「いっつううっ……！……てめっ、何すんだよ……！」

アルト「うっさい……！……重ッ」

刀を持つが、俺にすぐに返す。
重い？コレが……？

アルト「ばあーか。コレはな、所持者には重さが一切感じないよう
になってるんだよ。で、所持者じゃない人はその逆」

ニマニマしながら言う。
なんだよ、コイツ……！

第一話

扇「おー、藤！もう、大丈夫なのかー？」

勇「はいー、おかげさまで」

コイツは、ふじいぐれ藤勇。
装備科で、武器の手入れがすき。

克「おー、なんやー。今日は速いなあ、志具原」

扇「今日は、は余計だ！」

コイツは、しぐれかつみ時雨克。
射撃科で、武器は弓矢らしい。

勇「なあ！？志具原くんの、武器はあの三種の神器の草薙剣くさなぎのつるぎなんよ
ね！？」

扇「まあ、って。あ、そつか。お前あん時、気絶してたかな」

勇「そうや！！僕、見たかったのにい！！！」

残念そうに言う。

克「なあ、俺ら仲間欲しくね？」

扇「いきなり、何言い出すんだ？」

克「ほら、他んとこなんか物凄く集まってるやん？ほら、もう接戦^{アサ}科のお前が揃ってるから他の奴も集まるんちゃうかな、思ってる」

勇「そうですねえ…」

と、話していると。

アルト「ふむふむ、良い心がけじゃ」

「」「ぬわッ！」「」

勇「先生イ！？」

克「いつのまに！？」

アルト「にやはははは！」

そう、コイツは担任？の小鳥遊アルト（たかなしあると）だ。

アルト「お前らに強制的に任務を言い渡す！」

扇「はあ!？」

と、任務板から取ってきたであろう、依頼の紙をバンツ、と黒板に張る。

俺たちは見に行く。

勇「ええ!？本当に行くんですか!？」

扇「この寮って…」

アルト「そ、お前の寮とその隣の女子の寮」

何で入る奴がいなか教えてやるよ」と、にこやかに言う。
なんか…いやな予感が……

アルト「ま、藤が詳しそうだから、噂話したれ!」

勇「はい!」

と、藤が真剣な眼差しで言う。

勇「昔、あそこは大きな病院があつたんや。この安心院学園を作る為に取り壊されたって話なんですけど。その病院に、とある女の子

がいたんです。その女の子は生まれながら、そういうものが見れて皆に嫌われていたんです。両親はその子が生まれたときに、亡くなったんですけど。母親が、病弱だった為か、その子も病弱だったんです。だから、その子は病院から出た事がなかったんです。」

.....

勇「で、本題はココからなんですけど。ここの近くに森があるでしょ？あれは、この病院からのものだったんですよ。」

克「それは、俺も知ってるわ」

勇「ある日、その子が医師から許しを得て、病院の庭を散歩している時でした。その女の子は、男達に捕まったんです。それから、彼女が全然戻ってこない事に気付いた専門医師が、彼女を探しにいったんです。そしたら、彼女はレイプされたあとでして。真っ裸で見つかったんです。息はしてなかったです。首を絞められて殺されたもので。彼女は、ある意味2回殺されたんです。かわいそうに……」

女として殺され、人間として殺された。
アルトが、そう、呟いた。

そして、そのまま話を聞く。

第二話

勇「それからですね。出る様になったんは。噂によると、その子の専門医師いてはりますよね？あの人はその子の事を溺愛してはったんすよ。そんで、その死体を秘密に冷凍して腐らない様に保存してるって話も出ていたんですよ。そんなこともあって、安心院学園が設立された訳ですが。」

うわっ…その子って可哀相な子だな…

勇「それからですよ。出るようになったんは！！例えば、寮でゆっくりしていたら女の子の泣き声がするとか、呻き声がするとか、助けを呼ぶ声がするとか。他にも、最悪の状況で、入院した人もいはってんですよ。勿論、学園側も被おうとしたらしいんですけど、何度被っても出てくるんです。それは、男子寮も女子寮も同じでそんなんが絶えなかったんです。そんなある日に、理事長さんはその寮を閉鎖した。けど、やっぱり寮の量が足りひん時も遭ってん。その時は仕方なく使っんですけど。」

アルト「ありがとう、もういい」

うわー恐ッ！！！！

まさか、俺がそんな場所に住んでいたなんて！！！！
っっーか、だったらなんか言っとけよ！腹立つなあ！！

勇「そんな所に行き張るんですか!？」

アルト「ああ、因みに私は、この後用事があるから、お前たちだけで行け」

「「「はあああああつああ!?!?」「」」

この前の洞窟のときと言い、なんと言いつつ!!

コイツ…いい加減だ!!父さんくらいいいかげんさ!!

アルト「じゃ、頑張つてによ」

バタンッ

「「「……………」」」

シンッ、と静まり返る教室。

今は、6時。先生の癖に塾を放置する気が!!

克「ま、まあ…………行くか」

勇「はあ……」

扇「おう！」

まあ、この機会で被えるならラッキーって所かな

第三話

勇「うう…怖い……」

藤は恐がりすぎ。

俺たちは、まず殺された森へ行く。

克「ここか…」

と、森の中。

だいたい場所で分かった。時雨が言う。

克「……さて…手掛かりがないものか……」

扇「心霊現象って奴を待てb「きゃあああああああ!!!」」

勇「なに!？」

俺が喋っている途中に女の悲鳴が聞こえた。

多分、2、3人。俺たちはソッチの方向否、女子寮の中に入っていた!!

ここの女子寮には誰も住んでいないはずから、肝試しか何かで来た

のだろうと推測する。

俺たちは、途中女子にすれ違った。

「た、助けてください!!」

「ゆ、ゆゆ幽霊がああ!!!!」

克「分かった、どこでみた？」

「に、201号室です……」

勇「君達は逃げてえな」

「「「は、はい!!」」」

女子は逃げていく。

くそ、俺は言い所を見せなかったぜ!!!!

扇「いくぞ!!」

もう、むしゃくしゃだ。

俺は、走って201号室へ行く。そして、ドアを開ける。

ドンッ!!

——ビクッ!!

扇「む…?」

克「お前!行き成り走り出すなや!」

勇「ちょ、置いていかんといて!!!」

後から、二人がやってくる。

克「!」

真っ白い着物を着た可愛い女性がいた。

髪を少しだけ、前に出してその前に出している髪に包帯をしていた。
後ろ髪を見れば長さは腰までだと分かった。前髪はパツン。

肌が真っ白で、目に光はなかった。そして、どこか寂しげな表情をしていた。

勇「もしかして、この子が…」

と、ソイツは、窓から降りた。

俺たちは急いで窓に駆け寄った。が、彼女の姿はなかった…

克「……どうする?」

扇「よし！俺の寮で張り込みをしよう！」

克「はぁ！？」

扇「俺の寮、スグそこだし」

ってな、訳で。

俺の寮に行く事にした。

第四話

さっきの事から小1時間。

皆暇なのか俺の漫画本をゴロゴロして読んでいたりしていた。

扇「おなかすかないか？」

勇「あー、そういえば、何も食べてはりませんー」

扇「俺作るから待ってて」

勇「え！？作ってくれるん！？」

克「って言うか、お前作れるん！？」

扇「俺をなめんじゃねえ！！！」

キラッ、と俺の目は輝く。

そして、俺と時雨だけ厨房へ行った。

藤は、漫画の続きが読みたいからといって、こなかった。

そして、料理を作る俺。

それを見守る、時雨。俺は、簡単に肉じゃがを作った。
母親の味だ。

てきぱきと動く。

克「…意外やな……」

ボソツ、と時雨が言う言葉は聞き流して俺は、魚を焼いた。

そして、その間に米を磨いで、まあこれじゃあ野菜が足りないから、キャベツとにんじんでシンプルにコールスローサラダも付け加えるか。

と、米を磨いで急速でセツトし、焼いた魚の様子を見て、キャベツを刻む。

キャベツを刻んだ後に、焼き魚が焼けたので更に移す。そうこうしているうちに、肉じゃがが煮えた。

火を切って、人参を刻む。そして、皿をだす。そして、盛り付けをする。

勇「うわあっああああ!!?」

克「何!!?」

突然、藤の声が聞こえた…。

俺たちは、急いで俺の俺の部屋へ行った。

行っただいいが、ドアが開かない。
なぜだ!?

ドンッ!!ドンッ!!

克「おい、勇！……あける！……！」

時雨がドアを激しく叩くが開く様子はない。

扇「時雨、どいてろ！……！」

俺は、思いっきりドアを蹴破った……！

ああ……ドアが……まあ、今はどうでもいい……（よくないけど……）

克「勇……！」

ドアを開けたら、藤が倒れていた。

そして、首をさすっていた。よく見れば、首に手の痣があった……

勇「ごほっ、ごほっ……あ、っ……いき、ました」

苦しそくに窓を指差す。

俺は、黙って走って窓を越える。

克「志具原！……！」

そんな声を見殺していく。

一応、草薙は持っている。走って道なりに進む。

扇「くそっ！」

見失ったか！

と、思ったが。女子寮の方から、苦しそくに喚く女の声が聞こえた。
俺は、走っていく。

第五話

そして、女子寮に着く。

その声は、女子寮からではなくあの女が殺された森からだった。
俺はソコに走る。

そして、到着

扇「うわっ!!」

次の瞬間、ブワツと光が俺を包んだ。
俺は、思わず目を瞑る。

そして、光が止んだと思い目を開ける。

「やめて下さい!!きやあ!!」

「で、どうする?コイツ」

「適当にやってその辺に置いときゃいいんじゃないの?」

「バレたら?コイツ、喋るかもよ?」

「だったら、壊れるまでやるまでだ」

「え、ちょッ」

俺の目の前に、さっきの幽霊の女の子と男三人がいた。

1人は、ビデオを回していて、一人は女の子を抑えていて、一人は周りをキョロキョロ見ていた。なにやってんだよ…コイツ等

俺は、1人を触ろうとする。

が、触れない……

扇「なんでだよ……」

と、次の瞬間。

場面が一転した。

ソコは、さっきと同じ場所。

しかし、周りには警察がいて。医者もいて。

俺の目の前にはブルーシートの引かれた少女の姿があった。

その少女は、さっきのあの子だ……

首が絞められたあとがある……

藤と同じ位の痣が首にあり、真っ裸なのが分かった…

俺は…何も言えない。

それからまた、場面が一転して変わった。
ソコは、院内だった。

扇「コイツが…あの子の事を溺愛していた専門医師……」

背が高く痩せていて、目の下にクマがあった。
コレは…あの子の葬式…??院内で、こっそりやってる感がある。
棺おけの前でないているのが専門医師であろう。

扇「なん…で？」

死体がない。棺桶の中に普通ならいるのに。
いなかった。俺は、少し悲しくなった。

そういえば、この専門医師がこっそり冷凍保存していたって噂もあったって藤の野郎がいつてたな…
もしかして、この時点で……

俺は、ハツとしてドアの方向を見た。そしたら、さっきの子が悲しそうな顔で見ている。

俺は、走って着いていく。

扇「待て!!待ってくれ!!!」

と、その子はピタッ、と止まった。

扇「お前…今も……冷凍保存されてるのか…？」

——ッ！

扇「なんで、俺達を攻撃するんだ？なにもしないだろ？」

その子と対話する。

扇「ただ……お前を助けただけなのに。」

——ッ！……嘘……だって、私を殺した男達はそんな事を言っただ
ました！……どうせ、お前も同じだ……！！

ビュウウウ……！！

風が、思いつきり吹きつけて、物が全部飛ぶ。
俺の体も跳びそうになるが押さえる。

扇「確かに……そうなのかもしれないが……俺達は……違う……！！……！！

——黙れ、嘔吐き……！！……！！

また、風が吹きつける。

今度は車椅子が俺の頭に、当たる。

扇「つつう!!」

フツ、として俺はその子の方を見る。
その子は、廊下を走っていた。
ヤベッ!!!! 追いかけないと!!!!

第六話

扇「待てッ！！！」

俺は走って追いかける！！

階段を何段下りただろう。どれくらい走っただろう。とにかく、物凄く走った。院内を。

俺を撒く様に！！

しかし、執念深い俺は、追い掛け回した。

いつしか鬼ごっこみたいに思えてきた。

——ッ！

扇「分かってるぜ、またフェイントだろ！？…ぬわっ！！？」

行き成り曲がるもんだから、吃驚した。

曲がったすぐ先に、霊安室があった。……ココか？

この中に入っていった、その子はその中から出てくる気配がなかった。

俺は、致し方なくドアを開けた。

ドンッ

扇「さむっ！！！」

中は冷房が炊いてあった。

周りには、腐らないように弁当に入ってるアレみたいな奴が一杯あった。

そして、部屋の中心には人が寝ていた。覚める気配がなかった。いや…一生覚めないだろう。俺はそう、確信した。

だって、この死体は…

その子だったのだから。

扇「コレ…おまえ……！！？」

と、その子の霊がいたであろう場所に目を移すと。

いつのまにか、あの森に俺は立っていた。建物が病院じゃない事から現代に戻ったと考えられる。

いや、でも…なんで……？？

克「おい！大丈夫か！？」

扇「時雨！…藤は？」

克「部屋に札貼って寝かした」

扇「札つて！」

俺は、ツツコム。

扇「時雨…俺、いいこと考えた！」

あの子は、今も死体としてまだここにいるのかもしれない！
だったら、その死体を供養してあげれば……

克「ほんでも、お前、それ…どこ分かるんか？」

扇「…うーん、まあ、一応」

克「どこや！？」

急に問い詰められる。

だああ！！もう、ウザイな！話すし！

扇「女子寮に地下……」

克「はあ！？女子寮に地下なんてねえよ！」

扇「だよなあ…でも確かに女子寮の方向だったし……」

克「なにがいたいんや!？」

やっぱり意味が分かんねえよなあ…

だって、時雨はさっきの見てねエんだからなあ……

俺の直感だけど、多分。女子寮のあの辺にあるはず…

その為には、床を壊して掘らなくてわ…

克「ま、まあ!せやったら、可能性にかけるか…」

そう、俺たちには打つ手はなかったものだから。

とにかく女子寮に入って、床を見る。そして、思い出す。

あの子と追いかけたコースを…

克「あ、おい!」

俺は、追いかけてこしたコースを走ることにした。

第七話

さっきの男達は、急に女子寮に入っただと思うと走り出した。

どうやら、私と走ったあのコースを走っているらしい。

すごい…憶えてるんだ…

追いかけて…

私は、昔から病弱だった為やった事がなかった…

遊ぶ事があるに。あんなにタノシイだなんて。体を動かす事があるに楽しいなんて…

初めて知った…相手の男も心なしか楽しそうだった。

私は昔から人よりよく見えていた為、皆私を忌み嫌い避けてきたから、友達って奴もできた事ないし、その友達と遊んだ事がない。ただ、唯一のお話し相手は、「相場先生^{あいばせんせい}」だった。先生は私の専門医師で、私の事は何でも知っていた…。

私は、男達に乱暴されてから、殺されて、失望した。

先生の変わり様に。私を失った先生は、少し可笑しくなっていた。病院も止めさせられたとか…。

それは私の死体を隠したから。私の死体を持っていつちゃったから…

先生は私の死体でやっていた。私は、それを見てから先生を恨むようになった。

でも、先生は私を毎日綺麗にしに来た。内臓も体も…服を着せな

いで。

悲しい、悲しい、悲しい、悲しい……

扇「よし、多分ここだー!」

と、男がとある場所を指している。
そう言っと、床をバキツと壊した。

ええええ!?

なにやってるの?あの人!!

扇「よし、時雨。お前スコップもってこい!」

克「はあ!？」

二人は口げんかする。

そんなこんなで、スコップを持ってきた彼は彼にスコップを渡す。

男は、壊した床を更に壊して、その下にある土を掘り出した!!!

克「なんでそこまで…」

扇「俺は…救ってあげたいんだよ、あの子を!!何年間もあやつて、この中に閉じ込められてるんじゃない理不尽だろ？」

と、言い掘る。

ドキンッ！！

心臓が痛い…可らしい…今まで痛いつて事はなかったのに…なに？なんで…？怖い…

次々と掘り出していく。

私はそれを見つめる事しかできなかった…ただ…呆然と…

扇「ハアハア…お前も手伝えや！」

克「うつせえ！お前に言われなくてもやるわ！」

二人で掘る。

そして、また時間が経つ。

克「ハア…お前…コレ…本当にあるんだろうなあ！？」

扇「あるに決まってるだろ！……多分」

多分！？

私は分からないけど、出入り口は一つしかないらしいから、かなりの可能性だよ！？

扇「あ…あつた！…！！！」

二人は…ドアを探し当ててしまった…

第八話

扇「よ、よし…入るぞ？」

克「お。おう…」

緊張する……

なんせ、こんなかに、死体があるかもしれないからな…

ギイイ

克「寒ッ！！」

扇「だろうな」

よっ、と。

俺は中に入っていく。入っていくッと言うか、飛び込む。
次に時雨も飛び込む。

そこは、さっきみた光景と変わらなかった。
が、一つだけ変わっていたところがあった…

扇「コイツが…」

その子が寝ている傍に、やせ細った男の死体があった。
老衰しているらしい。随分前のものだ。一方のその子は、エンバー
ミングかなにかされてか
そのままだ。死ぬ前のそのまま。殺されたときのそのまま。首の
痣もくつきりと。

克「この子を供養したらええんやろ？」

扇「ああ…一応な…」

克「供養つちや、勇の方が得意なんやけどな…」

と、時雨が言った途端。
上から声がした。

勇「呼びました？」

克「おお！勇！！！」

ひょいつ、とおりてくる。

扇「大丈夫なんか？」

勇「はい、御陰様で」

克「ソレにしても回復早いな」

勇「まあまあ…首絞められただけですもん。それに、もう9時過ぎ
てますし」

随分寝ましたもん、と陽気に笑って言う。

はっ、さすが藤って所だな。よし、これでいい。

勇「じゃあ、供養しますんで。一緒に拝んでください」

と、にこやかに言う藤は、数珠を出す。

扇「なにソレ！スゲー！！坊さん？？」

勇「まあ、ウチの家がそんなんですから」

そう苦笑いしながら数珠を振る。

なんか…カッケー！！！！

———なんで…なんで……

扇「だから、言っただろ？お前を助けただけなんだって」

藤が供養をして、時雨が拝んでいる間。
俺は、その子と話していた。

——でも…人間はッ！！！！

扇「大丈夫。確かに、世の中良い奴ばかりじゃない。けど、悪くない奴だっているんだぜ？一度でもいいから信じてみるよ。人間を…俺たちを」

——ッ！！！！

その子は、言う。

——私…沢田希さわだのぞみって言います。

扇「沢田…希」

その子基、沢田希は、宙を浮かぶ。

——本当は私、普通の子みたいにはしゃぎたかったし、学校へも行きたかった…それが私の唯一の望みだった。けど…もう、叶わないよね……

扇「……希」

かわいそう。

素直にそう思った。ソレと共に、

なんとかしてやりたい。

と、思った。唯一の望みをかなえてあげたい…

アルト「あによー、寒いなあ……ま、えつと、希ちゃんだっけ？…
望み…かなえられるよ」

「「「え…」「」」

第九話

扇「どういうことだよ!？」

アルト「だーから、希ちゃんの望み…叶えられるよって」

叶えられる!？

扇「だったら今すぐ…ッ!！」

アルト「駄目だ。その為には準備が要る」

扇「準備…？」

なんだ…準備って。

それって、よくあるホラーで他の人の魂を生贄にしてって言うの…!!？

アルト「んなわけあるかッ!そんな事したら、罰せられるわ!」

ああ…まあ。そりゃ、ないよな……

扇「つて、言うか心読むな!!」

アルト「いやいや、声に出てたし」

扇「え?...あ、そっか」

そうなのか...今の話、声に出てたのか！
自分でも認識内ってどんな奴やねんって!!

アルト「まあ、嘘だが（ボソッ）」

扇「ところで、その準備って何なんだ？」

アルト「それは、見てのお楽しみ」

なんんだよ、それ

——あの...えつと...

扇「あ、俺、志具原扇ってんだ！」

克「俺は、時雨克」

勇「僕は、藤勇ですう」

扇「よろしくな、希！」

——う、うん……

曖昧な返事。
ん？

扇「どうかしたのか？」

——私……その……この名前、あまり好きじゃないの……

扇「そうなのか？」

——うん……

さて……どうした事が……
これは、やっぱりあだ名を考えるか、シンプルに……
ん？……それがいい！！

扇「そうだ！だったら、名前を変えればいいんだよ！……」

——え？

扇「大丈夫！俺が決めてやるから！」

——……本当？？

目から大粒の涙があふれ出る、希。

扇「おう!」

——ありがとう!

希は跳ねて喜んだ。

えーっと、じゃあ、どうしよう……

ん…?

扇「じゃあ、こんなのはどうだ?」

コソツ、と耳打ちする。

——わぁ…素敵な名前ね!……有難う!それにするね!!

勇「なに??何になったん??」

克「気になる」

扇「秘密だよ。ひ・み・つ」

——うん。私がこのお姉ちゃんに望みを叶えてもらえたら……教
えてあげる

ニコリと笑う。

アルト「そんじゃ、行くぞ希ちゃん」

——はい

スー、つとアルトの後について行く。

勇「先生！？この死体は？？」

アルト「後で、救護班を送って葬式を開いてもらう。だから、置いていいぞ。葬式ん時はちゃんと着てやれよ？」

勿論、行くに決まっている。

俺達は頷いた。

——皆さん……本当に有難う御座いました……

ぺこりと礼をして去っていったのが分かった。

その後、ニコリと微笑みスキップをしているようにも見えた。

反省

初めまして、神崎冥^{かんざきめい}です。

本日は、駄文をここまで読んでいただき有難う御座います。

^{くそすすとーりー}
被魔師物語第一巻。

こう、数日間かけてやっと出来た作品ですが、如何でしょうか？
一度、エクソシストモノでオリジナル連載やってみたいなーってノ
リで作った奴ですけど。

なんか…突発ネタですね（笑）だから、いつネタがきれるか分から
ない…（ ）

エクソシストとか専門的知識？が用いられるから結構難しいです
ね。

まあ、黙示録とかは元々知ってましたし。七つの大罪とかはこう言
うのが敵だったらいいなあって思ってた書きました。

まあ、まだそんな敵とか倒してませんけど…、頑張って主人公達に
は敵をなぎ払ってもらいますよ！！

と、まあ…。

^{くそすすとーりー}
被魔師物語第一巻。 完結！！全5章収録！！

と、言うわけですけど……

はい、第二巻も執筆する予定です^^頑張ります。

温かい目で見えてやってください。多少、面白くなくても、見て欲し
いです。

それでは、ここまで長々と有難う御座いました！
次巻もお楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1795v/>

祓魔師物語(えくそしすとすとーりー)【第一巻】

2011年9月5日11時24分発行